

空



2005年

SORA 10号

晴
夜
(10)

3

柴
田
佐
知
子

跳
べ
ば
す
ぐ
空
が
あ
る
な
り
鯨
五
郎

真
直
ぐ
な
黒
髪
を
も
て
卒
業
す

焼かれたる山が縮んでゐたりけり

尾鰭までひかり全き桜鯛

大空に突き返されし雲雀かな

憎らしきまでに金魚の太りたる

猫の子の覚めればいつも元気なり

魚も影曳きて過ぎたり青胡桃

曲
水

あさなが捷

お道具を失くして久し官女雛

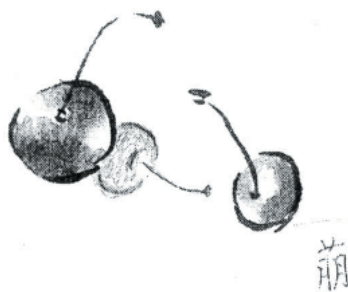
曲水の宴に男を置き去りに

強き節持つぎしぎしの片思ひ

オレンジをむく指先にみとれけり

さくら貝大気に守られし地球

ギリシャより星降り立ちていぬふぐり



優柔を捨てたる後の花衣

暗がりには涙を溜めて沈丁花

廃村の牛舎をおほふ山桜

筍を茹でる一日や父笑ふ

くれなゐの嘴を濃く巢立ちけり

大あくびして漂へる海月かな

白日傘遠目美人といはれけり

父母の若き写真や新茶くむ

勢ひで金魚を買ってしまひけめ

娘が結婚するとき、ぜひ持たせたいものがあります。それは、夫の祖母が、初節句に縫ってくれた雛道具の布団と五枚の座布団です。（ちなみに娘はお雛様はいらぬ由）

祖母は当時、九十歳を越えていて、その二年後に生まれた従弟の子の時には、もう気力が出なかつたようで、「何度か裂に物差を当ててはいたけれど」と後に叔母が話していました。

祖母の生家はもともと、黒田家が彦根から福岡に来るときに従って来た宮大工の家系でした。その流れは地場の工建設となつて今に至っています。

百三歳で亡くなるまで、美しく物静かで、いつも周囲に気配りを続けていました。奇しくも葬儀の日は五月三日で、街中にあふれるどんたくの祭囃子に送られて行きました。まさに最後まで、博多ごりよんさんでした。

句会では誰にも採ってもらえなかつたのですが、活字にしておきたい句です。

雛壇に祖母の手縫ひの布団置く 捷

秘
仏

小林 朱夏

迷ひ子に風船大きくふくらます

ももいろの胸を開くや大牡丹

小奇麗な母の声して水温む

葉桜や秘仏の傷は癒ゆることなし

怡土富士を幾度も越ゆる鯉幟

説明が億劫になり枇杷を剥く

・戒老忘備録・

最近、続いてシヨツクな出来事がありました。

ひとつは、通勤の地下鉄駅を居眠りして乗り越してしまったこと。これまでは眠っていても緊張感でそろそろだなどの勘が働いて、乗り越したことがなかったので、車内アナウンスを聞いても「この車掌さん駅名を間違ってる」と呑気に構えている有様でした。

夫が「また乗り越してしまいました。」と飄然としているのを見て、呆れ顔でどうして目が覚めないのかなと不思議でした。

ふたつめは、ガスコンロで火事を起こしそうになったこと。お茶でもと思い、ヤカンに少しの水を入れ、火を点けて沸



無口なる夫に連れ添ひ梅雨長し

誉め言葉少し聞きたし青葡萄

大茅の輪頭を垂れて潜りけり

夏料理女の会話途切れなし

運転手を眩しく見る子夏燕

鮎桶をまづ布巾もてならしけり

南京錠解けば土蔵の涼しかり

新任の教師の噂ソーダ水

独り居の母は西日を厭はざり

く間、郵便受けを覗きに玄関を出ましたら、お向かいの方と久し振りに出合わせ、立ち話が一時間近くになりました。頭の中では、テレビがつけっぱなしだなと気になっていましたが、ガスの火の事は完全に頭の外です。幸いにもヤカン一個を駄目にしただけで済みましたが、内心穏やかではありません。火事の原因第一位はガスコンロの火の不注意で、ニュースを聞く度に、他人様の不用心さにこれ又あきれていた事でした。

皺や白髪が増えていくことに多少の感慨はありますが、初めての失態が続いた身には、かなりのショックで、年を感じました。曾野綾子さんが若い時に書かれた「戒老録」 自らの救いのために、を以前読んで、愛蔵書の一冊にしています。私も遅ればせながら、私なりの「戒老忘備録」なるものを記していこうと思っ
ています。

卑下するは老いることなり青嵐

朱夏

山芽吹く

里中章子

薔薇の湯や胸に寄せたる薔薇いくつ

春の星降る山の湯の底にをり

川越しに捨て湯の訝杉の花

水口の泥の乾きや初燕

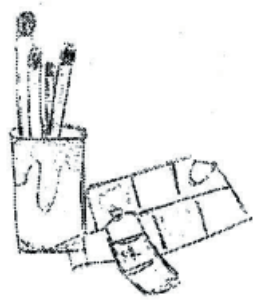
山の雨けぶる金縷梅群生地

林道に雪積む村の仏生会

・ 本場に必要なもの・

先日地震では、一瞬にして、思い出の品その他がぐじゃぐじゃになってしまふのを目の当たりにし、いよいよ身辺整理の必要性を感じた。まずは、物のない部屋に布団を敷けるように物を減らさねばならないのだが、言うは易く行ふは難しである。

最近昭和十五年岩波書店版の『お話』という児童文学の復刻版を読んだ。野上彌生子のやさしく端正な言葉で書かれた数々の童話は心に響く。その中の翻訳、トルストイの「人間はどれだけの土地がいるか」は、悪魔のせいで果てしない欲



雲一つ影置く山の芽吹きかな

姫筍皮ごと焼いて杣人は

蜜蜂を飼ふ丘の上のジャズ喫茶

白湯のんでまた墨を磨る花曇

お互ひの金魚の話淡々と

森青く蔵してゐたる椽の花

大瑠璃に息詰めてゐる樹林かな

石に座すはつなつの少年ひとり

包まれし薬くれなゐの朴の花

望に突き動かされた百姓の話。彼は日の出から日の入りまでに歩き回った土地が千ルーブルで買えると、夢中で歩き、走り、太陽の沈む瞬間にスタート地点に倒れこみ広大な土地を手に入れる。が、しかしそのまま息絶える。彼に必要だったのは、三アルシンつまり墓穴の長さの土地であったという寓話である。

《ただいだけのものを所有するということを知ったならば、一國にしても、一家にしても、また一個人にしてもどれほど平和に気がるく暮らして行けるでせう。私たちにとって一番大事なことは、本当にいるものと、それがどれだけいるかを知ることであるとともに、いるものが手に入らないのと、いる以上のものを手に入れようとすると、その二つのことに、現代の世の中の根本的な争ひと悩みとが含まれてゐることを忘れてはならないと思ひます》と彌生子は子供達とその母とに語りかけている。日本が軍国主義に突き進むうとする頃のお話である。

渾身

苑 実 耶

石臼は一番奥に鳥曇り

ここまでは種蒔き終へし棒二本

田楽や愚痴もほどほど混じりたる

骨までも柔らかく煮て春の鮎

放牧の牛に番号山笑ふ

ひと息をかくれば開きさうな花



己が葬取り仕切る夢花明り

商ふはつば焼ばかり志賀の浜

日本を熱く語りし春の宵

勢ひで摘みしクレソン持て余す

力なき父の手握る春の夜

四月尽見守るほかに術もなく

箒目をまた新しく百千鳥

堪へ性なきままに逝く薄暑かな

書道家の潭身の文字夏きざす

鳥には全く興味がなかった。鳥の名など数える程しか知らない。

庭の木の実が鳥に食べ尽くされた頃、夫が餌を置き始めた。最初は木の枝に刺し、次に木の下に置き、最後は居間に坐ったままでよく見える場所に。

鳥も慣れたのか、一心不乱に食べる。林檎は皮までも食べてしまい、バナナ、みかんは実だけを上手に食べる。

そのうち鳥が鵜うということを知った。夫は日永観察して、「二羽が交替で来ている」と言った。「あの小さい体でよく食べるなあ」とも言った。ある日、勝手口を出ると、柿の木に十数羽の鵜うが止まっていた。

鞆
鞆

高倉恵美子

烏雲に耳納連山杉多し

四人目の男子産まれし雛の日

ももいろの辛夷の苗を買ひにけり

さよならと言ひて蒲公英吹いてをり

囀りの真下に洗ふものいろいろ

父ははの顔の浮かびしさくらかな



古い一枚の写真。昭和九年、小学校二年の女組三十八名、奉安殿の石段に腰かけた懐かしい顔が並ぶ。そのうちの三人だけが洋服で、外の者は皆尻のあたりまでしかない鉄砲袖の羽織である。尻切れの羽織に前掛けをしており、まるでこれが制服みたいに見える。

鞆になに思ふとなく揺られをり

つんつんと尖る牡丹の蕾かな

蜷持ちて来たる男の無口なり

躑躅咲く隣人いつも留守なりし

山寺の高き石段鯉のぼり

遠来の友に薫つき夏蜜柑

筍を掘りたる夫に老いきざす

麦畑子供を一人隠しけり

連山に抱かれ蓮の開きけり

十年位前にはがき半分位の写真が出てきてそれを四倍ほどに拡大し、同窓会で配った。皆にとても喜ばれ、白黒写真なのに当時の着物の色まで思い出すという。あの頃モスリンの前掛けはたった一つのおしゃれだったとか、山間の田舎では写真撮影は珍しく、緊張していたとか、当時の話に湧いたものだった。

ここ二、三年同窓会が出来なかったので不意に思いつき友に電話したら、「もう来られない人が多くて集まるのは無理だろう」と言う。子供の頃、近所でよく遊んだ友に電話したら、息子さんが「母は元気ですけれどもなにもわかりません」と寂しい返事であった。この所、毎日写真を眺めているが、卒業してから六十七年、一度も逢っていない友も幾人かいる。